

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 7 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520340

研究課題名(和文) ソ連邦崩壊前後のアンダーグラウンド芸術の変容に関する研究

研究課題名(英文) A study about transformation of the art of underground before and after the collapse of the Soviet Union

研究代表者

鈴木 正美 (Suzuki, Masami)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：10326621

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：ソ連邦崩壊前後のロシアにおけるアンダーグラウンド芸術がどのように変化、変質、進化したかを明らかにするため、現地調査を行った。アンダーグラウンド芸術に関わった人々への聞き取り調査を行い、基礎資料を収集し、それらをもとに研究を重ね、研究会および一般公開のシンポジウムを開催した。これによりソ連邦崩壊前後のロシア文化の独自性についてあらたな知見を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：We made the field survey, how Underground art had changed, altered and evolved in Russia before and after the collapse of the Soviet Union. We went the interviews with people involved in the underground art and collected the basic data. We studied on the basis of them, held some conferences and the symposium, which open to the public. Thereby, we were able to obtain new knowledge about the uniqueness of the Russian culture before and after the collapse of the Soviet Union.

研究分野：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：外国文学 芸術諸学 比較文学 芸術史 非公式芸術 ロシア 前衛音楽 現代詩

1. 研究開始当初の背景

本研究は、基盤研究(C)「20世紀後半のロシア・中欧における非公式芸術の総合的研究」(平成18年度～20年度)を発端として、基盤研究(C)「ソ連非公式芸術とジャズ文化——創造の場とネットワーク形成に関する研究」(平成21年度～23年度)および基盤研究(C)「ソ連邦崩壊前後のアンダーグラウンド芸術の返照に関する研究」(平成24年度～25年度)をさらに発展させたものである。

先の研究で多くの資料を収集し、非公式芸術やジャズ文化に関わった多くの人々と知己を得たことで、さらに次の研究への礎を築いたことは確かである。しかし、それだけではまだ不十分であり、さらに資料の収集を必要とした。また、先の研究で得た人的資源を活用して、さらにソ連邦崩壊前後のソ連においてアンダーグラウンド芸術に関わった芸術家、詩人、音楽家等に現地で会い、聞き取り調査をする必要があった。

非公式芸術に関する個別の研究やペレストロイカ期の文化や芸術に関する研究はもちろん多くあるが、本研究のように非公式芸術と公式芸術との関係、芸術諸ジャンル間の関係、ジャズ・ロック・カルチャーとの関係、人形劇との関係でロシアのアンダーグラウンド芸術を扱った研究はほとんどない。従って、ソ連邦崩壊前後のロシアにおけるアンダーグラウンド芸術を本格的に研究する必要があった。

アンダーグラウンド芸術に関しては研究資料が少なかったため、地下出版やテープのダビング等によって残された諸資料を関係者から入手し、聞き取り調査をすべく、現地調査をさらに継続することにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ソ連邦崩壊前後のロシアにおけるアンダーグラウンド芸術がどのように変化、変質、進化したかを明らかにすることにある。ペレストロイカが始まった1985年からソ連邦崩壊(1991)後までの約10年間のロシア文化に関してはすでにさまざまな研究が行われているが、アンダーグラウンド芸術については、その全体像がいまだに明らかにされていない。本研究ではこのアンダーグラウンド芸術に関する資料の収集・調査はもちろんこと、この文化に関わった芸術家、音楽家などに現地で聞き取り調査をし、多面的なアプローチを行うことによって、ソ連からロシアへという劇的な社会変化の中における文化の多面的・複合的特質を解明しようと試みる。

当該研究では、1)非公式芸術と公式芸術の分離と融合、2)ジャズ・ロック・カルチャーの進化と変容、3)人形劇の変化と人形美術の誕生、という3つのテーマを核にし、以下のように研究を行う。

1)フルシチョフ以降のソ連時代、公式の展覧会場はすべて文化省とソ連芸術家アカ

デミーの管轄下であり、また公式の美術教育は芸術家同盟のメンバーが支配していた。社会主義リアリズムという公式の芸術に迎合できない画家たちは、そのほとんどがイラストレーター、装飾芸術家、舞台芸術家など、表向きは公式の画家としての仕事につきながら、余暇の時間を使って自由な表現の作品を密かにつくっていた。こうした作品はアンダーグラウンドで一般に公開されていた。展示場は主に自分のアトリエやアパートの一室で、毎週休日に公開したり、一日だけのゲリラ的展示も多かった。公式と非公式、日常と非日常という二重の文化構造の中で、60-80年代のソ連人は芸術を享受していたのである。しかし、ペレストロイカが始まり、1988年にモスクワでサザビーのオークションが開催されるや、こうした非公式芸術は世界的に公のものとなってしまう、二重の文化構造も崩壊していった。こうした非公式芸術と公式芸術の分離、二重構造の崩壊、その後の変化について調査する。

2)ソ連時代のジャズは公式の音楽として認められ、盛んに演奏されていたが、それはあくまでもコムソモールや政治権力、ソ連作曲家同盟の管轄下でのことであり、前衛的・実験的なジャズはやはりアンダーグラウンドで演奏されていた。そうした演奏の音源はペレストロイカ期になってレコード化されるようになった。ペレストロイカ期につくられたジャズとロックのレコードは400タイトル以上にのぼる。こうした音楽、音源、レコード、CDに関する資料調査と共に、現場にいた関係者への聞き取り調査を行うことで、ジャズ・ロック・カルチャーの進化と変容について考察する。

3)1931年のオブラストォーフ国立中央人形劇の創設以来、ソ連時代にはさまざまな人形劇が上演されてきた。人形劇は公式の芸術だったが、そこから派生した前衛的・実験的な人形劇もたくさんあった。児童文化の一部であるとみなされたために、その前衛性や実験性を問題視されることのない劇もある。日本では故大井数雄が旧ソ連圏の人形劇を精力的に紹介したが、こうした前衛的な人形劇にまで言及していない。ソ連邦の崩壊によって公式の人形劇場も運営維持が困難になり、その内容も変化していった。そして劇場のスタッフだった人形製作者の中から人形美術(ドール・アート)の作家として独立する者も登場した。こうした人形劇の変化と人形美術の誕生について調査し、1990年代のロシアの人形劇文化の特質を明らかにする。

以上3つのテーマは密接かつ複合的に関係している。非公式芸術は、美術、文学、音楽、映画、演劇等のさまざまな芸術ジャンル間での交流が盛んであったし、ジャンルを越えての共演、共同作業も多数行われた。前衛ジャズのグループとロック・バンドが共演するばかりか現代音楽との共演も度々あった。さ

らにダンスやパフォーマンス、詩の朗読などが同じステージに立つことも珍しくはなかった。また、非公式の画家たちがそうしたイベントの常連客だった。これらの非公式な舞台から生まれた新しい表現が公式芸術に流用されたり、逆に公式芸術の世界に身を置く人々の中にも非公式芸術を密かに支援している人物が多数いた。特に人形劇の世界では舞台外で独自の人形をつくる作家がいて、これらがまた非公式芸術の世界で用いられたりもした。

本研究では3つのテーマによる多面的アプローチによって、非公式芸術と公式芸術、芸術諸ジャンルのさまざまな関係性を調査し、アンダーグラウンド芸術を分析することで、ソ連邦崩壊前後のロシア文化の独自性を明らかにしようと試みる。

3. 研究の方法

まず、研究代表者である鈴木正美を研究の統括者として、メンバーを下記のようなグループに分け、それぞれの領域で研究を進める。

- (1) 「非公式芸術と公式芸術の分離と融合」研究グループ：鈴木正美、ミハイル・スホーチン、リュドミーラ・ドミートリエヴァ
- (2) 「ジャズ・ロック・カルチャーの進化と変容」研究グループ：岡島豊樹、セルゲイ・レートフ、アンタナス・ギュスティス、ロマン・ストリャール、アレクサンドル・ベリャーエフ
- (3) 「人形劇の変化と人形美術の誕生」研究グループ：大井弘子、吉原深和子、ナターリヤ・コストローヴァ

(1)のグループは、1950年代後半～1980年代のソ連において非公式に展開した前衛芸術を扱う研究グループである。1920 - 30年代のロシア・アヴァンギャルドとその後の社会主義リアリズムはまったく対照的なもののように見られていたが、これら二つの美術様式は、フルシチョフによるスターリン批判を経て迎えた雪解けの時代に非公式の美術において融合し、リアノゾヴォ派の美術やソツ・アートを生み出した。それらはさらにコンセプチュアリズムへと発展していったことは今日よく知られている。しかし、非公式芸術の研究は主に美術を対象に行われており、文学、音楽、映画、演劇等のさまざまな芸術ジャンルの間での交流が盛んであった非公式芸術の全体像はいまだに不明である。各ジャンルは密接に関連し合い、相互に刺激を受け、あるいは融合してまったく新しい表現を生み出していった。それは旧共産圏の文化の特徴を如実に表したもののばかりである。

非公式芸術に関わった多くの芸術家が同時に公式の仕事を持っていた。エストラダやテレビの世界で働きながら地下で前衛的な音楽を探究した音楽家、挿し絵やデザインあるいはアカデミズムの世界で公の表現を行い

ながら、自分のアトリエで自由な表現を行っていた美術家等である。しかし、ソ連邦の崩壊によって非公式芸術が非公式でなくなるや作品の内容も表現も変化していった。

そこで、本研究グループはアンダーグラウンドで展開した非公式芸術の諸ジャンルを対象とし、非公式芸術と公式芸術の分離、二重構造の崩壊、その後の変化について関係資料の現地調査・収集を行い、資料の分析をする。研究協力者のミハイル・スホーチン(詩人)は多数の非公式芸術家たちと交流があるので、現地調査のコーディネーターおよびメールによる情報交換を行う。リュドミーラ・ドミートリエヴァは文化センター「ドム」の創設者ニコライ・ドミートリエフの妻であり、1980年代の非公式芸術の現場にいただけでなく、現在も多数の前衛芸術関係者とのネットワークを活かした文化事業を行っている。彼女にも現地調査のコーディネーターをお願いし、メールによる情報交換を行う。

(2)のグループは、旧ソ連圏におけるジャズとロックについて研究する。旧ソ連圏の諸都市(主にモスクワ、サンクト・ペテルブルク、ヴィリニウス、アルハンゲリスク)でソ連邦崩壊前後(1980年代後半—1990年代前半)に開催されたジャズ・フェスティバルやロック・フェスティバルの主催者やジャズ・クラブ、ロック・クラブ関係者たちを現地調査し、あわせてペレストロイカ期にメロディヤから大量にリリースされたジャズ、ロック関係の音源資料の収集を行う。研究協力者の岡島豊樹はメロディヤから出たジャズ・レコード約400タイトルのほぼ半数を所有しており、モスクワのジャズ批評家やレコード・コレクターとのつながりも深い。彼らへの聞き取り調査と共に、さらに音源を収集する。セルゲイ・レートフは1980年代から前衛ジャズの現場で活躍しており、非公式芸術やロシア・ジャズに関する論文も多数あり、これまでも多くの情報、資料を提供して頂いている。今後も継続して研究に協力して頂く。アンタナス・ギュスティスはヴィリニウス・ジャズ・フェスティバルの主催者であり、リトアニアのジャズ史を熟知しており、旧ソ連圏のジャズ関係者との広いネットワークを持っている。彼からもこれまで多くの情報と資料を提供して頂いており、研究協力者として今後も本研究に参加して頂く。ノヴォシビルスクの音楽家であるロマン・ストリャールにはシベリアの音楽文化に関する資料を調査・提供してもらおう。アレクサンドル・ベリャーエフにはロック・カルチャーに関する資料を調査・提供してもらおう。このグループ全員の調査研究によって、ソ連邦崩壊前後の旧ソ連圏・共産圏におけるジャズ・ロック・カルチャーの変容について明らかにする。

(3)のグループは、人形劇と人形美術について現地調査を行う。生前のオブラスツォーフと交友のあった大井弘子(ビバボ人形劇)はオブラスツォーフ国立アカデミー中央人形

劇場他で現地調査を行う。吉原深和子(信州大学講師)はロシアの人形美術(ドール・アート)研究のために資料調査を行う。オブラスツォーフ国立アカデミー中央人形劇場附属人形劇博物館学芸部長ナターリヤ・コストローヴァには、大井と吉原の研究をサポートして頂く。

上記の3つの研究はどれも密接に関係しているため、個別の研究だけではなく、各研究者の積極的な協力と共同作業が必要になる。各研究者は個別の研究のための現地調査を行うが、それぞれの研究成果をもとに互いに報告しあい、各グループの共通項を検証しながら、アンダーグラウンド芸術を考察するための討論を重ねるよう毎年3~4回の研究会を行う。平成26年度にはロマン・ストリヤールを招へいし、諸研究協力者による国際シンポジウムを開催する。

4. 研究成果

(1) 2012年度

研究会の開催

平成24年度に研究会を4回開催した(2012年6月24日、7月13日、10月19日、2013年3月16日)。報告者と報告タイトルは次の通りである。吉原深和子(信州大学)「ロシアのドール・アートについて。最近の動向から」、アレクサンドル・ベリヤーエフ(ロシア国立人文大学)「ロシア文化におけるロックの衝撃」、大井弘子(ピバボ人形劇)「ロシアの人形劇文化 国立モスクワ中央人形劇場を中心に」、岡島豊樹(スラブ音楽研究家)「1960-70年代の東欧におけるジャズ文化」、鈴木正美「1960-70年代のソ連におけるジャズ文化」。また、2013年3月24日、モスクワにおいて研究協力者のスホーチンと共に研究内容について会議を行った。

海外における現地調査

鈴木正美は2013年3月22日 3月28日にモスクワに滞在し、資料(書籍、音源、映像)を調査・収集した。さらに、この間にモスクワのヴィンザヴォート・センター、リュミエール兄弟写真センター、文化センター「ドム」等の他、複数の美術館、ギャラリーで非公式芸術に関する展覧会を実見し、資料収集を行った。また3月25日、ロシア国立人文大学で開催された「フセヴォロド・ネクラソフ会議」に出席し、研究報告を行った。ネクラソフ研究者20数名と情報交換を行い、あわせて貴重な資料の提供を受けた。ロシアの現代詩や非公式芸術の研究者と知己を得ることができ、また日本では入手困難な貴重な資料を多数入手できたことは、今後の研究にとってたいへん有益である。

(2) 2013年度

研究会の開催

平成25年度に研究会を4回開催した(2013年5月18日、8月31日、2014年1月24日、1月

25日)。報告者と報告タイトルは次の通りである。鈴木正美「モスクワ最新動向2013」および「アルハンゲリスク・ジャズ祭1991

記録映像とソ連解体前夜のジャズ回顧」、大井弘子(ピバボ人形劇)「オブラスツォーフとの出会い」および「人形劇団カラバスとロシア・東欧の人形劇」、スヴェトラーナ・グヌチコヴァ(国立アカデミー中央人形劇場附属人形劇博物館)「人形劇博物館におけるさまざまな仕事と特徴について」および「国立アカデミー中央人形劇場と日本」。また、2014年3月22日-23日、モスクワにおいて研究協力者のアレクサンドル・ベリヤーエフおよびスホーチンと研究打ち合わせを行い、情報交換をした。

海外における現地調査

鈴木正美は2014年3月19日 24日にモスクワに滞在し、資料(書籍、音源、映像)を調査・収集した。さらにこの間に、現代アートセンター「ガレージ」、モスクワ現代美術館、文化センター「ドム」等で非公式芸術に関する展覧会を実見し、資料収集を行った。また、オブラスツォーフ国立アカデミー中央人形劇場附属人形劇博物館では人形劇団カラバスおよび大井数雄に関する資料を調査し、450点の資料(写真・書簡のコピー)収集した。さらに、彫刻家ラザリー・ガダーエフのアトリエでの調査を通じ、彼の子息である詩人コンスタンチン・ラザリーと知己を得たことで、現代詩に関する新たな知見を得ることができたのは大きな成果であった。研究協力者の大井弘子も2013年5-6月の2ヶ月間、国立アカデミー中央人形劇で研究調査を行った。

(3) 2014年度

研究会の開催

平成26年度は研究会および国際シンポジウムを4回開催した(2014年5月18日、9月21日、2015年2月1日-2日)。報告者と報告タイトルは次の通りである。鈴木正美「モスクワ最新動向2013」および「アルハンゲリスク・ジャズ・デイズ1992年度回顧」、ロマン・ストリヤール「ノヴォシビルスクにおける音楽のアンダーグラウンド」、木村英明「文学史」を問い直す 体制転換期のスロヴァキア文学」、梅津紀雄「音楽の冷戦と非公式音楽の隆盛」、岡島豊樹「フォーク・ジャズの諸相 ソ連末期から今日まで」。

海外における現地調査

鈴木正美は2015年3月17日 26日にサンクト・ペテルブルク、アレクサンドロフ、プロトヴィノ、ドゥブナ、モスクワ等5都市において現地調査を行い、アンダーグラウンド芸術に関わった多くの関係者に聞き取り調査を行い、各地の美術館、図書館等で資料(書籍、音源、映像)を調査・収集した。

(4) 研究成果の刊行

本研究の研究成果をまとめた研究報告集「ソ連邦崩壊前後におけるアンダーグラウンド芸術の変容に関する研究」(発行:新潟大学人文学部)を2015年3月26日に発行した。内容は以下の通りである。

- a) セルゲイ・レートフ「ソ連邦、ロシア、およびソ連邦崩壊後(ポスト・ソヴィエト)の地域における新しい即興音楽:生成の歴史と現在の状況」ソ連邦崩壊前後のアンダーグラウンドで展開した即興音楽について、その現場にいた著者が詳細に論じており、これによりアンダーグラウンドの前衛音楽が現在に至るまでどのような推移・変化をしたのかがかなり明らかになった。
- b) ロマン・ストリャール「ノヴォシビルスクにおける音楽のアンダーグラウンド:1980~2000」モスクワ、サンクト・ペテルブルクに次いで3番目の大都市であり、シベリア最大の都市でもあるノヴォシビルスクのアンダーグラウンド芸術についてはほとんど知られていない。しかし、本稿でストリャールはソ連邦崩壊前後のノヴォシビルスクにおける公式/非公式のジャズ音楽とロック音楽について概観している。レートフによる前掲論文を補い、かつ未だ知られざる地方都市の音楽文化について、その一端が明らかになった。
- c) 木村英明「公式・非公式芸術のはざままで チェコスロヴァキア・ジャズのささやかな回顧」公式と非公式のはざまにあったチェコスロヴァキアのジャズが、両大戦間期からピロード革命(1989)に至るまで、どのように変化したのかを論じており、グレーゾーンの文化とも言うべきチェコスロヴァキア独特の文化現象を考察することが、旧ソ連圏の文化を解明するにあたってきわめて重要であることが再認識された。
- d) 梅津紀雄「冷戦下の非公式音楽の興隆:文化現象としての後期ソ連」。雪どけ期にはグレン・グールドやルイジ・ノーノがソ連で演奏旅行をしたが、彼らの音楽や帰国したストラヴィンスキイの音楽の影響でソ連国内の音楽にも変化が現れ始める。やがてヴォルコフスキイやデニーソフ、ペルトヤシュニトケの登場によって、非公式音楽もさまざまな変化をしていった。こうした冷戦期の非公式音楽について分析し、後期ソ連の文化の特質を明らかにした。
- e) 岡島豊樹「フォーク・ジャズの諸相 ソ連末期から今日まで」。ソ連邦崩壊前後から現在に至るまで、ロシアのジャズにおいては、旧ソ連圏を構成した様々な民族による民族音楽がジャズ音楽の多くに色濃く反映しており、そのことがロシア特有の音楽文化をつくり上げている。そうしたジャズ音楽を「フォーク・ジャズ」という概念で括り、多種多様な音楽家とその演奏について分析した本論考は従来にないロシア文化論となっている。

f) 鈴木正美「『トリオ』後のタラーソフ」。ウラジーミル・タラーソフによる回想『トリオ』(1998)では、ガネーリン、チェカーシン、タラーソフによるトリオの音楽活動を中心に1970-1980年代のソ連のジャズ音楽をめぐる社会/文化の内実が明らかにされている(鈴木正美による全訳が2015年度に出版予定)。1987年に彼らトリオは解散したが、その後のタラーソフの活動について本論考では概観しており、ソ連邦崩壊前後から現在に至るタラーソフの表現の変容とその特質について明解に述べている。

研究代表の鈴木正美は研究成果として次の論文を発表した。

- a) 鈴木正美「ウチヨーソフとテア・ジャズー スターリン体制下のジャズと大衆音楽 (3)」。ウラジーミル・レヅツキイのグループ・アルハンゲリスキヤセルゲイ・クリョーヒンのポップ・メハニカ等、ソ連邦崩壊前後にはきわめて演劇的なジャズが演奏されていた。それらの音楽の淵源であるレオニード・ウチヨーソフのテア・ジャズが誕生するに至るまでの経緯について論じており、日本ではほとんど知られていない演劇的ジャズの特質について、その一端を明らかにしている。
 - b) Масами Судзуки「О переводе стихов Вс.Некрасова на японский в контексте японской конкрет-поэзии」。フセヴォロド・ネクラソフの詩は日本ではほとんど知られていないが、彼のミニマリズムの詩やヴィジュアル・ポエトリーを日本における具体詩・視覚詩の文脈の中で考察している。明恵上人、山村暮鳥、草野心平、春山行男、北園克衛、藤富保男、新國誠一など、日本の詩人たちの詩的言語の実験と表現は同時代の海外の詩とも緩やかに連動しつつ、同時に進化・変容している。ネクラソフの詩を日本語に翻訳する際、日本の詩との文脈を考える必要があることを論じ、国際ネクラソフ会議でも高く評価された。
 - c) 鈴木正美「ドミトリイ・プリゴフにおける詩的言語 声のコラージュから言葉のインストールへ」。ドミトリイ・プリゴフの1970年代から1990年代の詩をとりあげ、コンセプチュアリズムから独自の世界創造へと向かったプリゴフの詩的言語の実験について論じている。最終的にプリゴフはコンセプチュアリズムを越えて、詩的言語のインストールを作り上げるに至ったが、その過程を考察することで、ソ連邦崩壊前後に表れた詩ならではの世界観を明らかにした。
- 研究協力者の岡島豊樹は次の小論の他に、Webサイト(ブログ)「東欧ロシアジャズの部屋」<http://jazzbrat.exblog.jp/>に多くの論考を発表している。
- a) 岡島豊樹「『なんかよくわからんけど、ときどきみるあの盤』から垣間見える波瀾万丈のエグザイル・ジャズメン物語」、JAZZ

PERSPECTIVE vol.4、April 2012: p.98-99、
ディスクユニオン

- b)岡島豊樹「考える前に飛んでみたら？ーメロディア的珠玉のピアノ・トリオ盤と出会うための基礎知識ー」、JAZZ PERSPECTIVE vol.5、December 2012: p.106-107、ディスクユニオン
- c)岡島豊樹「ユーロ・ジャズの異界ヴィリニクス探訪 feat. チェカシンとその愛すべき弟子たち」、JAZZ PERSPECTIVE vol.6、June 2013: 100-101、ディスクユニオン
- d)岡島豊樹「ジャズ熱高まるロシアのジャズ・サクスのホープ、アレクセイ・クルグロフ先取り！ 徹底的プレゼンテーション」、JAZZ PERSPECTIVE vol.7、December 2013: p.114-115、ディスクユニオン
- e)岡島豊樹「ハンガリーのピアノ・ヒーローに花束をー第1回ジャズプラート功労賞発表ー」、JAZZ PERSPECTIVE vol.8、June 2014: p.118-119、ディスクユニオン
- f)岡島豊樹「いわゆる 222232222232322/16 物語ーバルカントン・ジャズLP 銘品店」、JAZZ PERSPECTIVE vol.9、December 2014: p.110-111、ディスクユニオン

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

鈴木正美、ドミトリー・プリゴフにおける詩的言語 声のコーラージュから言葉のインスタレーションへ、人文科学研究、査読無、第 136 輯、2015、27-46

Масами Судзуки、О переводе стихов

Вс.Некрасова на японский в контексте японской конкрет-поэзии、人文科学研究、査読無、第 134 輯、2014、5-21

鈴木正美、ウチョーソフとテア・ジャズ——スターリン体制下のジャズと大衆音楽(3)、人文科学研究、査読無、第 132 輯、2013、3-18

〔学会発表〕(計 3 件)

Масами Судзуки、О переводе стихов Вс.Некрасова на японский в контексте японской конкрет-поэзии、2013 年 3 月 25 日、Конференция “Художественный мир Всеволод Некрасова”、РГГУ

鈴木正美、ソ連の非公式芸術～「集団行為」のパフォーマンスを中心に、2012 年 11 月 25 日、新潟市美術館主催シンポジウム、新潟市美術館

鈴木正美、ロシア・中東欧の魅力を語る フォークロアから現代音楽まで、2012 年 6 月 30 日、早稲田大学ロシア文学会、早稲田大学

〔その他〕

鈴木正美、ワシーリー・グロスマン『人生と運命』(全 3 巻、みすず書房)の書評、北海道新聞、2012 年 5 月 6 日

鈴木正美、川村彩「ロトチェンコとソヴ

ィエト文化の建設」(水声社)の書評、ロシア文化研究、第 22 号、早稲田大学ロシア文学会、2015 年 3 月、p.87-92

ホームページ

Masami Suzuki 's Web Site

<http://www2.human.niigata-u.ac.jp/~masami/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

鈴木 正美 (Suzuki Masami)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：10326621

(2)研究協力者

岡島 豊樹 (Okajima Toyoki)

スラブ・東欧音楽研究

大井 弘子 (Ooi Hiroko)

ロシア人形劇研究

アンタナス・ギュスティス

(Antanas Gustys)

リトアニア・ジャズ研究

セルゲイ・レートフ (Sergey Letov)

ロシア・ジャズ研究。音楽家。

ミハイル・スホーチン

(Mikhail Sukhotin)

現代ロシア詩研究。詩人。

吉原 深和子 (Yoshiwara Miwako)

ロシア・ドール・アート研究

リュドミーラ・ドミートリエヴァ

(Liudmira Dmitrieva)

文化センター「ドム」

ロシア現代音楽研究

ナターリヤ・コストロヴァ

(Nataria Kostrova)

オプラスツォーフ国立アカデミー中央

人形劇場附属人形劇博物館

人形劇研究

アレクサンドル・ベリャーエフ

(Aleksandr Beliaev)

国立ロシア人文大学講師

日本文学研究。詩人。

ロマン・ストリャール (Roman Stolyar)

ロシア音楽研究。音楽家。

梅津 紀雄 (Umetsu Norio)

工学院大学・工学部・講師

ロシア音楽研究

木村 英明 (Hideaki Kimura)

世界史研究所

スロヴァキア文化研究